

寺報

発行
西938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山 善巧寺
TEL (0765) 65-0055
FAX (0765) 65-0975

善巧寺。法輪寺。照行寺。

生かされて生きている

一七日 十七夜お経会新年会
一九日 教区仏婦連盟新年会

布教 三寄靈証師

御正忌報恩講

一三日	昼一時	遅夜
一四日	昼一時	遅夜
一五日	一一時	お講・下村
夜七時半初夜	昼一時 遅夜	

一	日	修正会・年頭参り
三	日	お寺の学校かるた会
四	日	栗虫助成会
五	日	栗虫報恩講
六	日	花の会新年会
九	日	御正忌準備お華束もみ 一二日

寺
ごよみ
—
日



梯實圓先生撮影「一味」誌表紙より

て見ると、私たちは親の恩、先祖の恩、國の恩、自然の恩などさまざまなお恩の中で生かされています。日常「おかげさまで」と自然に口にする言葉が、それを表現します。ところが親鸞聖人は、なんでも「恩とはおっしゃらないのです。ご恩とは、仏さま阿弥陀如来さまの働きを、思わないのが宗祖であります。

いということは、人間として一番大事なことです。

今年もご正忌報恩講がやつてまいりました。全国各地にさまたな宗派のお寺がありますが、毎年報恩講を勤めるのは、淨土真宗だけだと思います。ご開山親鸞聖人のご命日を縁として、そのお徳を讃え、阿弥陀如來のご恩を知り、共にお念佛の心を聴聞させていただくご法要です。報恩とは、恩に報いるとか、恩にこたえるということです。

恩に報いる

自分が順境の時だけ恩を言い、逆境の時は、のろいの言葉をはくような生き方ではなかつたかと。親鸞聖人はどのような人生であつても、ささえとなり、力となる如来さまのご恩を喜ばれたのです。迷いの人生から悟りの世界に至る道をお念佛となつて働く如来のご恩を「身を粉にしても、骨をくだきても」

昨年、阪神淡路大震災は大変な被害をもたらしました。私の家内は実家が兵庫県です。被害はありませんでしたが、友人、門徒さんが皆心配してくれました。その時私は「おかげさまで、うちは大丈夫です。」「おかげさんで。」を連発しました。そしたら父親に「なにがおかげさんや、被害に遭つた人が聞いたらどう思うか。」と言われ、考え

私が恩に報いることは、唯お
念仏を相続させていただき、そ
の心を聴聞させていただくこと
です。

どうぞ、正忌参拝されて、ご
恩の世界をお聞き下さい。



空忌講

平成七年十一月五日 朝の講話より

前南米開教總長 高田慈昭先生

（その一）

おはようございます。昨晩から
らこの空華忌にご縁をむすばせ
ていただきております。今年の
六月まで四年程南米のブラジル
の方に行っておりました。六年大
ぶりでこちらに寄せていただい
たわけであります。

明治四十一年に、最初に日本から「かさど丸」という船に乗つて長い航海をして移民に行かれたわけであります。それから今年で八十七年目になります。戦争が終わるまでは大変な苦労をしながらも、働いてそれ相応の

望みを抱いて辛抱して苦労を重ねてきたわけであります。現在一世から五世、六世もおりますけれど、混血の人も交えて百二十万人の日系人がブラジルにいるわけでござります。その他にもペルーとかあるいはアルゼンチン、あるいはパラグアイとかそういう国々にも日系人が住んでおります。本願寺の教団は、戦後、仏教会ができてからあち

こちにお寺が建ちまして、現在五十五ヶ所の本願寺の仏教会の組織があります。また例えば千人くらい収容できる大ホールを持つてお寺もあります。そういうお寺がだいたい、小さなお寺も合わせて三十三ヶ寺、北はアマゾンの方から、南はアルゼンチンのブエノスアイレスという都市がございますね、そこにも本願寺がございます。パラグアイにもあります。もちろんサンパウロを中心として本部があり、別院がございます。ブラジルの州都であるブラジリアにも立派な本願寺が建つております。お坊さんも一時は割合おられたんですが、それだけのお寺を抱えながら、開教師のお坊さんはその半分ですね。二十人も足りません。しかもそのうち六人が外国人のお坊さんです。でもその人たちも皆非常に学問、知識のある人たちであります。日本語はほとんどわかりません。一般的の人たちは英語はほとんどわかりませんのでポルトガル語で布教をしていただいておるわけでございます。そういう風な組織が現在できまして、古い伝統的な仏教ではやっぱり西本願寺が最大の組織を持っているわけでございまして、一番新しい本願寺新報にも最近でおりま

アという所で今年度の第三十九回南米全体の仏教婦人会の大大会が行われまして、千二百人くらいの人が集まつたという記事が載つておりました。私もその大會には三回寄せていただいております。毎年千人以上の婦人会の人たちが集まるわけです。遠いところは千キロ、あるいは千五百~六百キロの所からバスに乗って夜通し走つて集まつてこられた人たちも多いのです。
去年は世界仏教婦人会の大会がありましたが、アメリカのロサンゼルスのアナハイムという所で、その時だけは南米の仏教婦人会大会は中止になりましたが、今年はマリリアで行われたということが載つておりましたので、懐かしく読ませていただきました。

す。ところがやはり、やがては日本へ帰れる、祖国へ帰れるという最大の望みが絶たれたというのではなく、シヨツクでございまして、日本が戦争に負けたと、いうのはデマだということです。絶対に負けたということを信じなかつた人たちのグループが非常に強い勢力を持ったことがあります。昭和二十年から二十二年の頃であります。その人たちは勝ち組といいます。また、日本はボツダム宣言を受諾して、天皇陛下が終戦の詔勅を出して、無条件降伏したんだという情報を素直に受け入れて、残念ながら日本は負けたんだと思う人を負け組という。その勝ち組と負け組が非常に対立しまして、争いが起つたんです。争いを仕掛けた方はだいたいが勝ち組の方なんですね。絶対日本は負けてないというわけですね。やがて宮殿下あたりが迎えにきてくださるという風な考え方を持つた臣道連盟という非常に過激な集団ができた。そして、負けたものは仕方がないじゃないか、そんな強がり言つてもだめだと素直に情報を信じようと強く言う負け組の人に対して、ピストルやナイフで撃ち殺したりしたことがあつたんです。十数人の死者と六十数名の負傷者がました。

これは日本人同士の戦い、勝ち組と負け組。今頃はそんなことはほとんど言葉う人はおりません。やっぱりそういうことを言うと過去のいまわしい、自分たちの恥さらしといいますか、そういうことは言いたくないです。

でも事実は事実であります。それがぐらいにですね、向こうの日本系人が祖国日本を思つてきたということはこれは私たちには十分に知らなくてはならんと思うんです。遠い遠い地球の裏側に帰る祖国がある、自分たちの生まれ育った日本へ帰る、帰る国があるんだということが、それまで日系人の生きる一番の支えだったんですね。それが無くなってしまったわけですが、でもその後、他のカトリック以外の宗教が國から公に認められた。それで今まで表面的には出ていないけれども仏教の行事というものはお坊さんもぐりで行つておられたようあります。すけれども、表向きの活動が出来なかつたんです。でもやつぱり人がなくなつたりするところ、お葬式もしたい。日本をでる時から正信偈やら阿弥陀經を覚えてきた人がおるわけですよ、そんな人たちが坊さん代わりになつて、お葬式をしたり、法事みたいにしてきたんです。

そういう人もいないうちは仕方がないからキリスト教の教会へ行つたわけです。今ではお葬式の時にますと、向こうはまだカトリックの国だから、お葬式の時に位牌をお葬式屋さんが持つてくる。それが大きな十字架の白木を持つてくるんでですよ。家は仏教徒やからそんな十字架はいらないと言うても、亡くなつたらそういう十字架の木を持つてくるもんじやという習慣が染みわたつているもんで言うても聞かん。仕方無いから、十字架の横の木を切つてしまふのもおりますし、あるいはまたどうにもこうにもならん、そんなことをしたらなお変な気持ちを起こすからというわけで十字架の上に南無阿弥陀仏と書いたというのが今でもあるんですよ。

(次号につづく)



勧学昇階記念祝賀会

梯實圓先生

12・14

月十四日、高槻京都ホテルで開催され、真宗高田派常磐井和子お裏方さま、本願寺総長、津村別院輪番、行信教授の先生方、卒業生、学生、全国専精会支部の会員など、およそ二百人

人が集まつてお祝いしました。「行信のあたたかい雰囲気と厳しい姿勢の中で、求道の人間のあるべき姿へ、若い方々をお育てください。かけながらお喜び申します」と和子お裏方。「梯先生が勧学になられて本当にうれしい。私はお淨土で勧学にならせてもらいましょう」と高田慈昭先生。

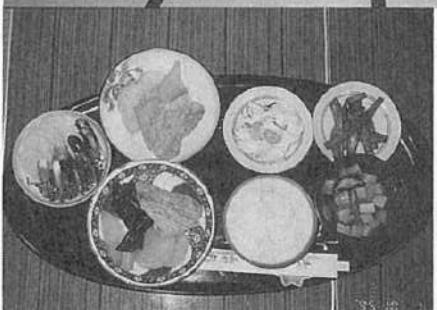
「私はいい師匠に会わせていました。この方に会えて世



うんかい、お寺に参つておられるのだったら、仏教の教えをあんたどうして聞かんのや。学校で洗礼受けたから? ジャあんたカトリックの教えを本当に信じてるんか、本当にカトリックで古くは学林の能化(学頭)で、古くは学林の能化(学頭)に由来し、浄土真宗の教學のトップをにいたら分かん人が多い。そういう習慣の中で育つてきたといふだけの話なんだ。仏教はね、キリスト教に負けんほどの深い教えを持つておる。その深い深い教えがお父さんやお母さんや先祖から伝わつてきた、その大きな深い教えを全く顧みないで、この国におけるから簡単にカトリックに入るという加減なことをしないで、これからお寺へ来て仏教の教えを聞いてください、と私は必ず言うんですよ。

この祝賀会が十二月十四日、高槻京都ホテルで開催され、

梯實圓先生。その他若林先生の玄人はだしの落語などがあつて和やかな祝賀会がありました。善巧寺からは俊隆と、司会を仰せ付かつた坊主が出席しました。淨圓先生。私はお許しを得て転載させて頂きました。



三日市お講

一〇月一六日

高令化で一時は存続があやぶまれた三日市お講も、このようにまた定着したことはよろこばしい限りです。

特徴はやはり「茶めし」で
おかげりが続出。お吸いものも良い味で、しつかりした味付だと男性です。



下立愛本お講

一一月一一日

そろそろ雪がちらつくかと思われるころ、境内の銀杏が黄金色に輝くころのお講です。

厚揚げも人参、大根、里芋もダイナミックにどんどん大きく煮てあります。大根と人参のごま油、大根の酢のもの。おつゆはどうぶ、こんにゃく、人参等と実だ

パーフェクトに近い出席率。なかなか

派やかなお土

皿数も多く食

卓もにぎやか。

大きな麺の煮

物、色どりの良

いサラダ、すいきの酢の

ものも、けつこうでした。

板屋お講

一〇月一日

こちらもまた、一軒だけが都合がつかなかつたというすばらしい出席率。和気あいあいムードの浦山新で

す。笑顔もあたたかい。朝の風がお米づくりに良い影響をもたらし

て、お米は富山で一番とご自慢です。

浦山新お講

一一月一六日

善巧寺ゴルフコンペ開催

11・4

高田慈昭先生の帰朝歓迎記念
ともうべき善巧寺ゴルフコン

ペが十一月四日、棚山ゴルフコン
樂部で行われました。お寺の法
座ではなかなかお目にかかるな
い門徒さん方二十名ばかりが集
まり、八時二十分、高田先生の始
球式でスタート。杉の木立から
さす朝の木もれ日が実に美しく
高田先生も「いやあええ氣分や」。

三時すぎまでかかる長時間のコ
ンペになりましたが、懇親会で
はなごやかにビールをくみ交し
ました。優勝は栗虫の川内一美
さん。よろこびの挨拶では、是
非この次も優勝したいとはや次
回開催への期待を述べました。
参加された方々は次の通り。

川内一美、佐々木哲哉、浦田隆
夫、谷口正、新保満夫、橋日出
夫、鬼原猛、川口信行、山本浅
司、野崎育治、中林興市、丸田
貞夫、朝倉淳、川瀬達也、神子
勉、神子巧、雪山俊隆、雪山教
隆（敬称略）



優勝の川内一美さん

カメラマンの手がふるえて残念ながらピンボケ。
でも記念写真はこれだけなので…。



おわび

一一月一日の愛本新のお講の写真を撮ることができませんでした。大変申し訳ありません。来年度の紙面で必ず紹介させてもらいます。

台所の手がすいた時や人手が充分な時は、年に一度のお講じやもんと、境内の清掃もしてくださいます。ようこそ。

滋賀県神崎郡福堂のお寺では戦争中、お米のない時代に、ごはんのかわりに茶碗に土をもつてお講をつづけたといふことです。

私たちもこのすばらしいおみのりの伝統を、次の代へしっかりと引き継ぎましょう。



さてどんじりに控えしは——、浦山のおなじみの顔ぶれです。忙しい年の瀬はお寺に近い地元の方々でということなのでしょうか。野菜五目ごはん。豆腐、じいたけのおつゆ。大根、人参、厚揚げの酢のもの。漬物は、たくあん、浅づけ、奈良漬など。写真撮影というのでお茶も並べてくださいました。

一一月一六日

浦山お講

「勸学」——本願寺派および興正寺派における最高の学階の名稱。一派の学頭として学事を勧奨すべき地位という意(真宗辭典)。行信教校の梯實圓先生が「勸学」になられました。今回は梯先生著「大悲の智慧」という小冊子の中の言葉を紹介します。

「念佛とは、根源的には私をかけがえのない大切な仏子として如来さまはごらんくださることに気づいて、子どもが母をしたうそれが念佛なのです。子どもは念佛においては、真実のみ親に出会い、また仏子としてのほんとうのがたに気づかしめられるのです。(中略) 私たち一人ひとりが如来の大切な子であるのということに目覚めさ



いるのです。私だけではない、他の人もこの人も、かけがえのない大切な仏子として如来さまはごらんくださることに気づいて、子どもが母をしたうそれが念佛なのです。子どもは念佛においては、真実のみ親に出会い、また仏子としてのほんとうのがたに気づかしめられるのです。(中略) 私たち一人ひとりが如来の大切な子であるのということに目覚めさせています。

今年は夏が長く、いつまでも暑い日が続き、10月に入つてやっと秋らしい風を感じることができました。このところずっと、来年迎える20周年のことでの頭の中がいっぱいです。

仲秋のある日、何気なくこれまでの会報を読み返してみました。創刊号の発行は1977年1月20日となっています。JLBCの発足が前年の11月ですから、ほぼ同時に会報の編集作業がスタートしたことになります。

その記念すべき第1号はわずか8ページしかありません。中心記事はJLBC結成記念フェスティバル。

その中で私は「女性は結婚して、子供を産み、育てていく中で、家庭だけに閉じこもりがちになってしまいます。(それではだめだ)ボウリングを通じて、健康を維持し、優しい気持を養い、友情の輪を広げていきましょう」と言っています。

これはJLBCのスローガンである四つの言葉(表紙参照)を説明したにすぎないのですが、今でも少しも変わらないJLBCの呼びかけであり、また私たちの存在意義でもあると思っています。

私は人との巡り合わせに恵まれている、といつも感じてきましたが、ある年の代表あいさつでは、人に教えられることばかりと正直に書いています。19年間継続してきた会報の中には多くの人に教えられ、支えられて育ってきた思い出がいっぱい詰まっています。

では、私たちスタッフが皆様にお返しできるものは何でしょうか――。

「常に参加される皆様の側に立つことを心がけ、その精神の中で背伸び過ぎず、卑屈にならず、長く継続していくこと」

ささやかな団体である私たちにとって、継続こそが力です。その象徴が今回76号になった会報だと思います。

JLBC会報No.76 11月1日号に掲載された須田さんの巻頭言

日本女子プロボウラーナンバー1 ワンの須田開代子さんが十一月二十一日午前七時半、バージニア州の病院でなくなりました。
須田さんは故隆弘とはプロによる前からの付き合いで、何かと相談に来院されたことも度々あり

ました。落語の会には団体で来て下さったり、記憶に新しいところでは、平成4年十月にお寺座のトククシヨーに出演してくださいました。十二月十九日、須田さんの合葬にかけて、坊守が式進行をさせてもらいました。

初日の出 加越能を一望に
信心の足音たえず
しんらん忌
俊之

一日 六日 三日 市報恩講
お講・浦山
舟見報恩講
九日
八日
一月
寺
二月
寺
二月



寺 ごよみ

三月

一日 お講・浦山

四日 浦山報恩講

五日 仏婦連盟黒西組総会

六日 白鶴会新年会

七日 楠屋・熊野報恩講

八日 入善・泊報恩講

九日 下立報恩講

一〇日 雪ん子劇団新川文化ホール公演

一一日 音沢本山助成会

一二日	生地報恩講
一三日	一四日
一四日	一六日
一五日	一七日
一六日	一八日
一七日	一九日
一八日	二〇日
一九日	二一 日
二〇日	二二日
二一 日	二三日
二二日	二四日

二四日 雪ん子劇団春の公演
コンテスト
二〇日 総代会教化推進協議会
二〇日 富山本願寺スピーチ
二三日

